

推薦の言葉

大谷タカコ

高槻友子さんは、以前当院（大谷助産院）に二度見学に来られてお会いしておりますが、小さい体にパワーがみなぎる明るい方だという印象と同時に、お産に対して熱い思いをお持ちで共感する所多く、非常に親しみ深く旧来の友の様な思いを持っておりました。この度、ブックレット出版にあたって推薦文の依頼を頂き、私ごときにと大いにとまどいましたがペンをとらせて頂きました。

本文を拝読致しまして、彼女の豊かな生活体験を通して、私から見ればほんのかけ出し助産婦位の経験年数なのに、自然出産の神髄をついた内容、特に自然農法の中から得た、自然への畏敬、自然の巧まざる姿に人の生死を重ねて（これもまた自然）そのなりわいを考えておられるとは何とも奥の深いすばらしいことと思えました。

私の様に戦前戦後（古いなー）を純農村で育ち、父母の手伝いとして農作業や椎茸栽培等に関わって山野をかけまわって大きくなったものにとっては、彼女の原点がよく理解し共感できます。

また、ご自身の妊娠出産子育ての体験を通して女性にとってのお産とは、生命誕生とは、まさに生き方そのものであることを訴えられています。女性が主体性を持つて自分が選ぶ自分が主役のお産をすることが、その後の子育てや生き方に結びつくのだということ。産む者もそれを助ける側も今こそ真剣に考え、想いを広めて行かなければならない時が来ている様に思います。正に一石を投じられたと同じ思いを持つ者として拍手を送ります。

お産はほんとうに一人一人がみな違い、産み終えるまで未知なるものがあります。しかし、自然はすべて時にかない、それぞれの持つ産む力生まれる力を統合されて、生命誕生の時を与えられます。

私達助産婦はそうした自然の前に謙虚に、持てる専門的知識・技術また知恵をもって、生命に寄り添い生命を育みその役割を果たして行かねばならないのではないのでしょうか。

この小冊子をこれから親になられる若い方達に、また助産婦として活躍されている方、助産婦をめざそうとしている方達に是非読んで頂きたい。戦後の日本のお産の移り変わりや現代の病院出産・医療介入がお産にもたらすものなど、やさしくそしてするどく見極められており、きつといい刺激を与えられると思います。

第1章 はじめに

なぜ今もお産に関わり続けているのでしょうか。四人の子どもを産みました。もうこれ以上産むつもりはありません。その意味では、もはや私はお産の当事者ではありません。けれど、それでもお産に関わり続け、こだわり続け、ついには助産師を目指して看護学生となりました。三十九歳で四人の子連れ、子どもも九歳、六歳、四歳、二歳とまだ小さいし、連れ合いは始めたばかりの養鶏と畑で忙しく、生活も苦しい。のんびり学生がやれる身分とはほど遠いのです。それでもお産を通じての出会いが、私をここまで運んでできてしまいました。十年前、一年余の中南米の旅から戻ってきた時、自分の生き方ははつきりと決まりました。暮らしに必要なすべてを、自分達の手で紡ぎ出すインディオの暮らしを目のあたりにし、それに比べて、日本の都市生活は貧しく見えました。金や物はあふれていますが、自らの生活を成り立たせる術すべはもちません。金銭を媒介として、必要なものを買って成り立つ暮らしは、一見合理的に見えますが、危うい綱渡りでもあります。どちらを選ぶか、答えが見えました。金も物もいらぬ。暮らしに必要なものは、可能な限り自分の手で作り出そう。生きていることの、確かな手応えのある生活がしたい。

そうして静岡県の山里で自給自足の暮らしを始めました。その時、私は妊娠六カ月。へどう産むか、そうした暮らしの始まりと共にありました。お産は生活の一部だから、日常生活の場に近い環境で出産したい、と思いました。それには病院はあずましくなかった（北海道弁で「居心地がよくない」「すわりが悪い」というような意味の言葉）のです。土間に薪ストーブ、炭火の掘りゴタツ、畳に障子が日常の生活空間でしたから、病院は場自体が非日常的すぎて、違和感が強く、身体が萎縮してしまいます。それに「他人ひとまかせにしない」生活を選んだのですから、妊娠・出産も医療におまかせする気になれず、どうすれば納得いくお産ができるか、探し求めました。

幸い、前の仕事（有機農産物の卸し）の関係で、助産院で出産した人の手記を読んだことがありました。その体験記にピンとくるものがあって、同じ助産院を訪れました。助産師さんとも気が合い、畳もふすまもあって、そして何より、助産師さんの生活のぬくもりがあることに魅かれて、結局四人の子どもを皆、ここで産みました（二人目からは自宅分娩も考えましたが、その助産師さんに会いに行くのが楽しみで、助産院で産んでしまいました）。

彼女は「その人らしい、自分を出しきったお産がいいお産だと思うから、産婦さんの希望にできるだけ添えるようにやっています」とおっしゃいます。お仕着せの母性に女性をあてはめてゆくのではなく、まず一人一人の人間をみつめ、その人らしい母性を掘り起こし育むやり方に、私は随分支えられました。自己の女の部分をなかなか受容できずにいた私にとって、出産は高いハードルでした。妊娠している自分を肯定できない。出産を私らしく通過できなかつたら、私の中の女は拒否されたままになってしまう。子どもとの暮ら

しもうまくいかないだろう。自給自足生活の礎^{いしづえ}としてだけでなく、自分のセクシュアリティにとつても〈どう産むか〉は切実な問題だったので。

お産をめぐる出会いの中で、今も忘れられない言葉があります。高度な医療介入・管理分娩を行っている病院の助産師が、分娩を戦争にたとえて「戦略」をたてようとしたそうです。そのことに憤慨して、ある開業助産師が「冗談じゃない。私は戦争なんかがなくなら世の中になるように、産婆やってるんだ」と語りました。お産にそこまで深い意味があるのか、と目からウロコの落ちる想いでした。

いかに生まれる（産む）かは、その人の生き方にまつすぐつながっています。私にとってお産は、十年前に選びとった生き方のあらわれとしてありました。だから、今もってお産と縁が切れず、その結果として助産師をめざすようになりました。

そして先の助産師の言葉からも明らかのように、お産は文化の一部、社会とは無関係ではありません。効率最優先の管理社会では、お産も自ずと管理分娩へと傾いてしまいます。お産は個々人の生き様を映すだけでなく、社会全体を映しとる鏡でもあるのです。

*第1章は『北海道の市民活動をネットワークし、応援するマガジンNODE』1997年6月20日号に掲載されたものを一部訂正・加筆しました。

第2章 産む人が選^えびとるお産